



健康社会学研究会

# ニューズレター No.46

発行：健康社会学研究会

事務局：〒504-8504 岐阜県各務原市那加桐野町2丁目43 東海女子短期大学 森川研究室内

FAX：0583-83-5455 E-mail：healpro@tokai-wjc.ac.jp

ニューズレターNo. 46/2007年3月 編集担当：臺 有桂・金子 純子

## 新年挨拶

健康社会学研究会 副代表 金子純子

新年あけましておめでとうございます。

2006年は皆様にとってどのような年でしたでしょうか。

日本漢字能力検定協会が、全国で9万2509通のはがきでの応募を集計した結果、最も多い8262通（約9%）に「命」という文字が寄せられ、皇室で41年ぶりの男児が生まれたこと、いじめによる自殺や子供虐待、飲酒運転による死亡事件などが相次いで発生したことを受け、「1つしかない命の大切さを痛感させられた1年だったから」との選定理由で選び出された文字として、2006年の象徴語に選ばれたことはみなさんの記憶にも新しいのではないのでしょうか。

私にとっての、2006年は新しい自分の発見と、気づきの年だったように感じています。自分は人より熟慮時間が短く、衝動的に物事に飛びつく節があり、2006年は後悔の連続だったような……。その度に「もう一日考えれば結果が違ったかも」と反省を繰り返し、「待つことのできない自分」に気がつくことができました。便利なものが増えた現代、「じっと待つ」と言うことは、少なからず多くの人が苦手になってきているように感じます。「命」の重みや尊さを噛みしめるためにも、物事を慎重に決め、熟慮することの大切さを感じます。

また、私は日頃の運動不足に加え、年々増加する体重に恐怖を感じつつ、自分の健康づくりのために昨年「ホットヨガ」に通い始めました。冷え性だった身体はポカポカ、快眠、快便と良いこと尽くし。ヨガをしている最中は自分に向き合い、神経を集中させているので心の平穏にもつながり、癒しを得られる気がしています。

健康社会学研究会に所属されておられるみなさんは、ご自分なりに「健康づくり」を推進され、その経験を基に、住民のみなさまに「健康づくり」をお伝えする使命をお持ちの方も多いいことだと思います。是非ご自分でなさっておられる「健康づくり」について、研究会にご意見をお寄せいただければと思います。

2007年は、今まで以上に会員のみなさまと交流を深めたいと考えております。重ねて、月例会、セミナーへの参加をはじめ、ニューズレターへの投稿など心よりお待ちしております。みなさまからの貴重なご意見・ご感想は今後の研究会の運営に関する大切な資料となりますのでどうぞ忌憚のないご意見をお寄せください。

本年もよろしく願いいたします。みなさまにとってよりよい年になりますようお祈りし、新年の挨拶とさせていただきます。

### 第14回 職業リハビリテーション研究発表会

論文発表「一般就労に向けた指標作りの試み」

黒岩直人（茨城県南部障害者雇用支援センター指導員・産業カウンセラー）

昨年末の12月5、6日、千葉県幕張の（財）海外職業訓練協会及び障害者職業総合センターにおいて第14回職業リハビリテーション研究発表会が開催された。全国の障害者の就労支援機関や各教育機関を中心に障害者の職業的自立に向けた研究や事例発表の場として毎年、幕張の地で積極的な意見交換がされている。今年は、障害者自立支援法が施行された年でもあり、例年に比べて参加者も多く、特に福祉施設関係者の参加が多かったようである。具体的には、精神、知的、身体、発達、高次脳機能障害など障害全般にわたる内容で、分科会、シンポジウム、講演等が行われた。この社会の中で如何にして障害のある方たちを自立させていくかという前向きな内容が特徴的である。そんな中、私も知的障害の分科会で「一般就労に向けた指標作りの試み」として発表させて頂いた。

本研究は、私が勤務する茨城県南部障害者雇用支援センターの実践過程で生じた課題とその課題への対応策そして新たな課題とその方向性について行った。研究にあたっては東海女子短期大学の森川講師と協同で実施する。障害者雇用支援センターは、全国に14カ所、『障害者の雇用促進等に関する法律』に基づき、身体、知的、精神障害の方を対象に職業準備訓練を通じて障害者の自立と職業の安定を支援していく専門機関である。

平成10年の開所以来、多くの障害者が一般就労という形で職業的自立を成している。訓練生の殆どは知的障害である。障害特性は、強い幼児性と依存性、注意散漫、低い理解力など課題が多く、社会への参加は難しいのではという認識を抱きやすい。

当支援センターでは、自力通所をはじめ、常に親亡き後を考えて自主的な行動を促すことを基本としている。訓練においてはステップアップ方式を取り、個々の能力に応じた段階的な指導を実施している。また、作業基準値を明確に設定し、細かなデータ収集と分析を行い、訓練生の能力及び成長度合いの把握に努めている。加えて、成長段階で生じる不安定な精神状態の支援として、定期的なカウンセリングを実施するなど生活面でのサポートも含め包括的な支援体制で臨んでいる。訓練を進めていく中で、一人の人間として大きく成長し一般社会へ巣立っていく障害者は少くない。

しかし、依存的で全く主体性を持たない保護者の意向のみで入所してくるケースが増えてきている。仮に就職したとしても無断欠勤や早退、遅刻などを繰り返し離職してしまうケースが殆どである。一度離職してしまうと就職に対する抵抗感が増大し引きこもってしまうなど、職場への定着は重要な問題なのである。そこで、主体性及び社会性を図る尺度の必要性から評価指標を作成するに至ったのである。その評価結果を百分率で表しスコアとした。その結果、就職者平均値に満たない93.3%の者が離職又は、職場不適応状態であるという結果がでた。多くの属性で分析を行

った結果、年代及び離職経験などにおいて有意差がみられた。その背景として、保護者の養育態度、又、社会政策的に社会化を促進する状況があるか否かが主体性及び社会性に大きく影響していると考えられることである。

この研究からは、障害者も等しく成長し段階的な社会化の過程が不可欠であるとの認識が得られた。こうありたいという意欲や物事に取り組む積極性は、自身の可能性の幅を大きくも小さくもする。実際、障害者が社会参加するには、社会変革のみが必要だとする見解が殆どではないだろうか。しかし、実際に障害者の就労支援を行ってみると、彼らの可能性の高さに驚かされることが多い。それには自己効力感が大きく影響する。自ら可能性を感じる事が成長のスタートになるのである。権利主張に傾倒せず、成長するという人間としての義務を果たすことが優先されるのではないだろうか。

## 「第 21 回 日本国際保健医療学会」

小山 修（日本子ども家庭総合研究所／健康社会学研究会運営委員）

21 回目を迎えた日本国際保健医療学会は、2006 年 10 月 11 日から 13 日まで長崎市において開催された。この学会へ初めて参加したのが松本市で開催された第 7 回大会（1992 年）からなので、すでに 14 年を経たことになる。

大会のメインテーマ「Tropical Medicine and International Health in Transition」でもわかるように、本学会大会は第 41 回日本熱帯医学会と合同で開催された（合同大会は今回で 3 回目になる）。合同大会だけに、特別講演 6 本（うち招待外国人講師 3 人）、シンポジウム 7 本、ワークショップ 16 本、ポスター口演 71 本、自由集会 10 本、学生フォーラム、サテライト集会など盛りだくさんな企画が組まれていた。全体の印象は、感染症、寄生虫など、どちらかという疾病に注目した報告が多かったが、自然災害、旅行医学といった今日的な課題も設けられ、3 日間参加していれば国際協力に関する知識がかなり身につくのではないかと思えた。また、熱帯医学や国際協力を専攻する若い医師、研究者、学生も多く大変活気のある大会であった。

特に関心を持ったシンポジウムでは、「MDGs \* 目標 4—子どもの死亡低減のために何をすべきか—」（\* Millennium Development Goals; 国連ミレニアム宣言、2000 年）、「国際保健人材の育成と確保」（いずれも JICA との共同シンポジウム）、「国際学校保健—政策から実践へ—」「文化人類学は医療協力の役に立つのか？—医療従事者と人類学者との対話にむけて—」（国立民族博物館との共同シンポジウム）などで、このうち 2 つのシンポジウムに参加したが、どの報告者も課題と方法をよく整理しており、示唆に富んだ内容であった。

また、14 年前の大会では、チェリノブイル原発事故後の国際協力や、在日外国人の医療問題などに関心が集まったが、本大会では、通信衛星を活用した地理情報や生態情報などについてワークショップが開催されるなど、まさに一昔前では考えら

れなかった技術が普及しつつあることを実感した。

私は、当研究会の会員でもある中村修一さん（九州歯科大学）や深井穂博さん（深井歯科医院）などに誘われてネパール歯科医療協力会（ネ協）のメンバーになっており、過去3回ネパールでの活動に参加している。ネ協では、歯科医療を中心に学校保健や母子保健分野まで活動を広げており、その成果は本学会と日本健康教育学会などにおいて毎年発表している。今回は「途上国における学校歯科保健の成果に影響を及ぼす因子」（深井ほか）「途上国における口腔保健専門家養成プログラムの問題点と課題」（蒲池世史郎ほか）「ネパール王国カトマンズ郊外の農村の離乳食の実態」（安倍一紀ほか）の3本を報告した。

余談だが、学会ツアーを利用したので2泊3日朝食付き、往復飛行機利用で約4万円の出張であった。長崎は3度目であるが、ほとんど観光をしたことがなかったので、市電を乗り継いだりして可能な限り見て回った。夜は卓袱料理（しっぽくりょうり）、中華料理、昼は長崎ちゃんぽんと、旅行先での食事はめったに記憶に残らないのだが、今回はなぜか忘れていない。

### 「第65回 日本公衆衛生学会総会」

齊藤進（日本子ども家庭総合研究所／健康社会学研究会運営委員）

平成18年10月25日、26日、27日と3日間にわたり、富山県富山市（富山県民会館・富山国際会議場）において開催された。

学会長講演をはじめ、招待講演、メインシンポジウム、サテライトシンポジウム7本、教育講演6本、奨励賞受賞者講演、特別研修プログラム2本、公衆衛生行政研修フォーラム6本、ランチョンセミナーが行われた。また自由集会は25日夜に22集会、26日10集会が開かれた。一般演題は18分科会、3日間にわたって発表された。内容の主なキーワードは「安全」と「安心」で、安全、安心の社会へのアプローチを各領域から提示する企画が多かった。

また、2会場で開催され、会場が若干離れていたこともあり、私は、自分の発表と関係の深い地域保健や健康教育の発表会場である県民会館を中心に参加した。中でも発表者と直接質疑できる示説発表を主に回ったが、会場の設営の関係から、質疑しやすい場所としにくい場所があり、会場の地理的關係や場内设営の難しさを感じた。

私は、地域組織活動の活動成果尺度について報告したが、場所のせいか、例年以上に質疑に訪れる方がいて、多くの示唆を受けることが出来た。

当研究会として、今回の学会では自由集会を開かなかったのは、残念であった。しかし、人手や準備等の関係で未開催になった。今後は、出席者数や企画等にこだわらず、気軽に集まれる会にして開催するというのも一方法ではないかと考えている。

## 会費納入状況と納入のお願い（事務局より）

### 1. 18年度会費について

所定の払い込み用紙、もしくは銀行振り込みにて平成18年度会費の納入をお願いいたします。

郵便振替：00100-8-41025      銀行口座：みずほ銀行広尾支店（普通）1842122

### 2. 16年度、17年度、18年度会費納入について

お手数ですが、平成16・17・18年度会費（5000円／年）を未納の方は同封の払い込み用紙にて早急に納入ください。未納の方は、本ニューズレターを発送した封筒に未納年度を記載しています。ご参考までに平成16～18年度年会費納入者リストを下記に挙げました。

#### ■平成16～18年度年会費納入者一覧（敬称略）

16年度会費納入者	17年度会費納入者	18年度会費納入者
会津善宏、荒井今日子、石井朱美、伊藤常久、岩永俊博、江島房子、岡田まり、岡本暁、奥野ひろみ、小山修、北嶋景子、金子純子、金子元彦、河原加代子、桐谷勝、斉藤恭平、斉藤進、座間味悦子、塩田みどり、柴田眞理子、下山田鮎美、杉山克己、鈴木みちえ、染谷眞喜子、武見ゆかり、立道肇、田中久子、臺有桂、鶴見拓俊、寺田薫、中島敏、中野照代、中村修一、中村教彰、成木弘子、西菌洋、花岡真佐子、林二士、藤田八千代、古川照美、深井穫博、星野明子、増田美恵子、山上綾子、松岡正純、森川洋、森山良典、山中紀夫、山本春江、油井治文、吉田由美、和田耕太郎、渡邊洋子、渡邊能行、岡田進一、田中直代、吉岡康、岡田栄、岡本良子、中村譲治、高澤みどり、森田健太郎、山口忍	会津善宏、荒井今日子、伊藤常久、岩永俊博、江島房子、岡田まり、岡本暁、奥野ひろみ、小山修、北嶋景子、金子純子、金子元彦、河原加代子、斉藤恭平、斉藤進、座間味悦子、塩田みどり、柴田眞理子、下山田鮎美、杉山克己、鈴木みちえ、染谷眞喜子、武見ゆかり、立道肇、田中久子、臺有桂、寺田薫、中島敏、中村修一、中村教彰、成木弘子、西菌洋、花岡真佐子、林二士、古川照美、深井穫博、星野明子、増田美恵子、山上綾子、松岡正純、森川洋、森山良典、山中紀夫、山本春江、油井治文、吉田由美、和田耕太郎、渡邊洋子、渡邊能行、岡田進一、田中直代、吉岡康、岡田栄、中村譲治、高澤みどり、山口忍、鈴木茜	会津善宏、荒井今日子、伊藤常久、岩永俊博、江島房子、岡田まり、岡本暁、小山修、金子純子、河原加代子、斉藤恭平、斉藤進、座間味悦子、塩田みどり、下山田鮎美、杉山克己、鈴木みちえ、染谷眞喜子、武見ゆかり、立道肇、田中久子、臺有桂、寺田薫、中島敏、中村修一、中村教彰、成木弘子、西菌洋、林二士、古川照美、深井穫博、星野明子、山上綾子、松岡正純、山本春江、油井治文、和田耕太郎、渡邊洋子、渡邊能行、岡田進一、中村譲治、高澤みどり、山口忍、鈴木茜、和田ゆかり、長島朋子、渡辺多恵子、黒岩直人、馬場さつき、後藤拓

平成19年1月15日現在

## 平成19年度 月例会及びセミナー開催日程(予定)

現在、平成19年度の事業計画(案)を運営委員会にて検討しているところですが、月例会及びセミナーを下記のとおり開催する予定です。具体的なテーマは、追ってお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

### ■月例会

第1回…平成19年4月21日(土)	第2回…平成19年7月21日(土)
第3回…平成19年9月29日(土)	第4回…平成20年2月2日(土)

### ■セミナー

第1回…平成19年6月9日(土)終了後、総会を開催
第2回…平成19年12月1日(土)

## 平成19年度 第1回月例会 開催のお知らせ

**テーマ:知的障害をもつ人たちの一般就労を目指した取組み**

**報告者:黒岩直人氏(茨城県南部障害者雇用支援センター)**

**日時:平成19年4月21日(土) 15時~17時(受付14時30分~)**

**会場:日本子ども家庭総合研究所 3階会議室**

**参加費:会員無料、非会員1000円**

障害者福祉領域では、作業所や授産施設における福祉的就労に焦点があてられています。その一方で、労働行政や当事者の主体性という立場からは、障害をもつ人たちの一般就労と就労の定着が主要な課題として挙げられています。

養護学校を卒業すれば、作業所や授産施設に入所や通所するという限られたライフコースから、卒業後一般企業などに就職し、自立した社会的な生活を送るというライフコースを開拓していくためのひとつの取組みについてご報告いただきます。